

仙台国際音楽コンクールニュースレター

第6回仙台国際音楽コンクール 【2016年開催決定!!】

第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会 東京公演 ソヌ・イエゴン ピアノ・リサイタル演奏評

真嶋 雄大 (音楽評論家)

2013年5月から6月にかけて、予定通り第5回仙台国際音楽コンクールが開かれた。3年に一度のコンクールであるから、言うまでもなく東日本大震災による甚大な被害を直接被った後の、初の開催である。当然その催行が危ぶまれただけに、実施に向けた関係者諸氏の膨大なご尽力、お骨折りを想像するだに頭の下がる思いがする。

さて第5回コンクールのピアノ部門には、予備審査を通過した10の国と地域から37名が出場した。国別では韓国の11名を筆頭に、日本の9名、中国の4名、アメリカの3名がそれに続いたが、その頂点に立ったのが、韓国のソヌ・イエゴンである。

ソヌ・イエゴンは1989年生まれ、これまで2010年のエリザベート王妃国際コンクールでファイナリストとなり、2012年にはウィリアム・カペル国際とピアノキャンパス国際の両コンクールで優勝の栄冠を得た。すでに演奏経験も豊富であり、ボルティモア交響楽団やベルギー国立管弦楽団等と共演、ソロ・リサイタルやアンサンブル活動も積極的に行っている。



その優勝記念リサイタルが6月20日、浜離宮朝日ホールで開かれた。プログラムは、モーツァルト「ピアノ・ソナタ第10番ハ長調K.330」、ショパン「バラード第3番」、リスト《巡礼の年 第1年 スイス》から《オーベルマンの谷》、休憩を挿み、チャイコフスキー《四季》から「6月〈舟歌〉」、「8月〈収穫の歌〉」、「10月〈秋の歌〉」、そしてラフマニノフ「ピアノ・ソナタ第2番」。前半は古典派からロマン派に至る時系列でのピアノ音楽の王道であり、後半はロシアもので纏められている。

きわめて繊細で詩情豊かなピアニストである。モーツァルトではほぼノンペダルで通し、特に第1楽章ではウィーン式アクションを思わせる打鍵や方向性でモーツァルトらしさを標榜する一方、弦であれば所謂短く切るデタシエという奏法ではなく、ある程度レガートを多用し、またフレーズの中で微妙にテンポが揺れるという、幾つかの異なるベクトルが同居している演奏であった。また細かいパッセージでの不統一さも気にはなったが、それでも第2楽章での馥郁たるカンタービレを伴った抒情性や第3楽章での軽やかな風趣はやはり大きな資質を感じさせた。

続くショパン「バラード第3番」は正統的でオーソドックスな対峙であり、モーツァルトよりはテンポの柱が明確に立っていた演奏である。冒頭9小節目や13小節目にあるアクセントは控え目でありながら存在感に満ち、主情的過ぎない歌い方で誠実に弾き進めていく。この辺りがソヌ・イエゴンの持ち味なのであろう。フレーズも丹念に扱っているから清新な息吹が湧き起り、しっとりとした歌が香り立ってくる。またオクターヴで開始される第2主題は心を浮き立たせるような躍動を秘めながら実に美しく、嬰ハ短調の展開部は、徒に激情を煽るではなく、節度の効いたコントロールの中でショパンの情念を描いて比類ない。

前半最後のリストも、ダイナミズムや思索性という見地からはやや物足りなさを感じたものの、音楽を音楽として捉え、自らが設定した枠の中での精妙な情景の変化、色彩の移ろい、また作曲家のメッセージをストレートに銜いなく表現することにかけては見事なポテンシャルを示したといえるだろう。

さて、後半である。全体のプログラミングから鑑みて、「四季」を置くのは少々異色かもしれないが、沁み入るようなセンチメンリズムとメランコリックな情感が郷愁を紡いで斬新。このチャイコフスキーも他と同様、造形と展開にもう少し深みが欲しいところだが、醇美なニュアンスを伴って存分に歌われる旋律美は高く評価されている。

本プログラム最後はラフマニノフ。CDなどを聴く限り、もっと低音の重厚感や高音の煌めきなどを期待したが、この日はドラマティックなラフマニノフではなく、緻密な分析に基いたロマンティシズム溢れる際立った感覚が印象的であった。タッチは清冽で色彩は千変万化の様相を呈し、目眩めくような情感が押し寄せる。土臭いロシア情緒というよりは洗練された芳醇な香りと才気に満ちたイメージネーションが独自の情熱を織り上げていた。

アンコールはヴィルトゥオージティを前面に押し出した、リスト「ラ・カンパネラ」を2曲目に挟んでの、メンデルスゾーン「結婚行進曲(ホルヴィッツ編)」と、シュトラウス(グリユンフェルト編)「ウィーンの夜会」というともにパラフレーズ。大いに会場を沸かせたが、いずれにせよ、今後の活躍が大いに期待される逸材である。

第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念演奏会 東京公演 ソヌ・イエゴン ピアノ・リサイタル演奏評

道下 京子 (音楽評論家)



昨年の仙台国際音楽コンクールの覇者、ソヌ・イエゴンは1989年生まれの25歳。15歳までを韓国で過ごし、その後はカーティス音楽院とジュリアード音楽院といった、アメリカ屈指の名門校に学び、現在もピアニストとして演奏活動を行ないながら、マネス音楽院で研鑽を積む学生でもある。

仙台のコンクールで私が彼の演奏に接したのは、ラフマニノフ《ピアノ協奏曲 第3番》を演奏したファイナル・ステージであった。本人にうかがったところ、以前にもこの曲をオーケストラと共演したことがあるそうで、コンクールにおいても安定した演奏を仙台の聴衆に示した。

とてつもなく強靱な指の持ち主で、抜群の運動神経を誇る一方で、燃え立つようなパッションとロマンティックな情感を併せもち、スケールの大きな演奏を聴かせてくれた。

コンクールではコンチェルトの演奏ということもあり、管弦楽と渡り合えるほどの豊かな音量と音色に彩られた演奏が印象的であった。今回、東京・浜離宮朝日ホールではリサイタル形式。モーツァルト、バラード、リスト、チャイコフスキーそしてラフマニノフの作品によるプログラムは、このピアニストを多角的に見ることのできる格好の内容と言える。

プログラム冒頭のモーツァルトに接した瞬間、以前に聴いたイエゴンとはまったくその趣を変えた演奏に、私は大きな驚きを覚えた。コンクールで拝聴した時とは異なり、何か彼の心の迷いが表われた演奏である。リサイタル序盤は硬さも感じられたが、演奏が進むにつれ、身体も気持ちも徐々にピアノやホールに馴染んでゆき、プログラム後半からは、彼本来のエネルギッシュな音楽を取り戻した。

このリサイタルでは一貫して、デリケートな弱音が冴えわたっていた。陰と陽のコントラストを明確に打ち出したモーツァルト《ピアノ・ソナタ》K.330。透き通るような硬質の音で、清新なモーツァルトを描き上げてゆく。左手の弾力に富んだタッチが生き生きとした表情を生み出した両端楽章に、第2楽章をしっかりと挟み込む。旋律線の抑揚をありのままに活かしたさり気ない歌い直しにも、好感が持てる。ただし、細部にわたり隈なく描き出そうとするあまり、かえって萎縮した印象を与えてしまい、音楽の広がりや欠いた点は惜まれる。ショパン《バラード 第3番》では、強音の表現を控えめに抑え、持ち味である多彩で美しい弱音とクリスタルのような音質が、神秘の世界へと聴く者を奥深く誘う。続いて、リスト《巡礼の年 第1年「スイス」》から「オーベルマンの谷」。卓越した演奏技巧と知性あふれる解釈を礎とし、リストの精神世界に深く迫る。時おり振り返るようなしぐさは、孤高のリストに対する彼のオマージュなのか…。

後半は、ロシア音楽によるプログラミング。1月のノースウェスト室内楽フェスティバルで演奏したチャイコフスキー《四季》より、「舟歌」「収穫の歌」「秋の歌」の3曲。もともと、ロマンティックな表現のうまいピアニストであり、彼は作曲家の心の憂いに寄り添い、そして過去を追憶するかのよう、もの静かに郷愁を滲ませてゆく。また「収穫の歌」における、生気みなぎるリズム表現など、各作品の情景を明晰に表わした。プログラムを締めくくるラフマニノフ《ピアノ・ソナタ 第2番》は、1931年版を使用。イエゴン特有の広大なスケールと幅広いデューナーミク・レンジ、そして深淵から沸き立つような情熱が炸裂する。とりわけ、前半に散見されたタッチの迷いはもはや消え失せ、怒涛さかまく情熱と濃厚なロシア・リリズムが相まったイエゴンのピアノには、聴く者の胸に迫るものがある。アンコールはメンデルスゾーン《結婚行進曲》の編曲、リスト《ラ・カンパネッラ》、そしてヨハン・シュトラウスⅡ世《こうもり》の編曲。

プログラム全体を通して、例えばモーツァルトやラフマニノフにおけるテンポ設定や楽譜の読みなど、課題も感じられた。しかしながら、彼の魅力も存分に堪能できたのも事実である。研ぎ抜かれた演奏技巧と美しい音、そして雄々しく劇的なロマンティズム…次に彼の演奏に接する際には、コンクールで私たちが圧倒した、命を振り絞るような迫真のピアノを聴きたい。

* 公演概要 *

第5回仙台国際音楽コンクール優勝記念リサイタル 東京公演

ソヌ・イエゴン ピアノリサイタル

- ・日時：2014年6月20日(金) 19:00開演
- ・会場：浜離宮朝日ホール (東京都中央区築地5-3-2)
- ・プログラム:
モーツァルト/ピアノ・ソナタ 第10番 ハ長調 K330
ショパン/バラード 第3番 変イ長調 op.47
リスト/巡礼の年 第1年 スイス「オーベルマンの谷」
S160-6
チャイコフスキー/四季 op.37bis から
6月「舟歌」8月「収穫の歌」10月「秋の歌」
ラフマニノフ/ピアノ・ソナタ 第2番 変ロ長調 op.36
(1931年版)

アンコール

- メンデルスゾーン作曲 F.リスト/ホロヴィッツ編曲
「真夏の夜の夢」op.61 第4幕 結婚行進曲
- リスト/ラ・カンパネッラ
- シュトラウス作曲:グリユンフェルト編曲/
《ウィーンの夜会》ヨハン・シュトラウスのワルツ主題による
演奏会用パラフレーズ(オペレッタ《こうもり》などから)
作品56

ソヌ・イエゴン公演情報

広島交響楽団 秋山和慶のディスクバリー・シリーズ
「音楽の街を訪ねて」第10回ニューヨーク

指揮：秋山和慶

演奏曲：ガーシュウィン：ラプソディ・イン・ブルー
(グローフェ編曲) 他

日時：2014年9月12日(金)18:45 開演

会場：アステールプラザ大ホール(広島県)

料金：S席 ¥5,200 A席 ¥4,200 ほか

お問合せ：広響事務局 TEL: 082-532-3080

ソヌ・イエゴンさんが ヴァンドーム国際 ピアノコンクールで優勝!!

ソヌ・イエゴンさんが7月にスイスで開催されたヴェルビエ音楽祭のヴァンドーム国際ピアノコンクールで優勝しました。このコンクールは1999年から3年ごとに開催されているコンクールで、優勝したソヌさんは2015年のヴェルビエ音楽祭に招待される予定です。

第5回仙台国際音楽コンクール公式CD 好評発売中!!



収録曲：
ラフマニノフ：
ピアノ協奏曲 第3番 二短調 op.30
モーツァルト：
ピアノ協奏曲 ハ長調 K467
【FOCD9613】

- ・指揮：バスカル・ヴェロ
- ・管弦楽：仙台フィルハーモニー管弦楽団
- ・発売元：株式会社フォンテック
- ・価格：各2,400円(税別)
- ・制作：公益財団法人仙台市市民文化事業団

